友人との力動的関係を利用して治療を進めることは，絶対に不可欠なことであるが，友達があれば安心であるとはいえない。友人の質，量，結びつき等の考察も大切である。

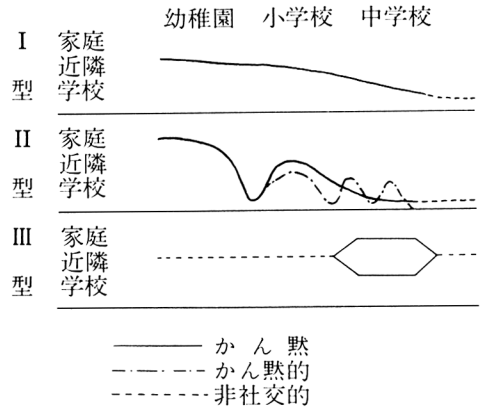
45．効果の少ない指導—家庭について　（小学校）

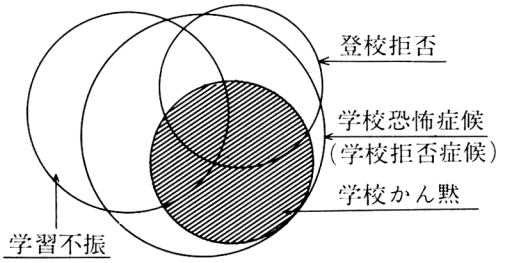
教育事務所		県北	県中	県南	会津	南会	相双	いわき	計
家庭	親の付添登校		1						1
	父兄の無理解の改善						1	1	2

家庭の無理解などについては，長い時間をかけて指導する必要があろう。

II　かん黙症の類型

自閉症・重度精薄・ろう唖・吃音・構音障害・失言症・痴呆症・児童期精神病・精神分裂病・思春期精神病・ヒステリー性かん黙などの障害によってもかん黙症状があらわれるが，一般には心因性かん黙（全面かん黙と選択かん黙に分けられる）と言われるかん黙症状が多く，われわれが教育相談的なアプローチをおこなうことができるのは，この心因性場面選択型のかん黙症である。以下その型の分類を提示してみる。





III　かん黙児童・生徒のとりあつかいについて

たしかに，かん黙症はおとなになればなおることが多く，ほとんどの人は必要にせまられて最少限必要な言葉，日常生活にこと欠かないだけの言葉を使うようになる。しかし，学校かん黙症で問題になるのは，ことばが少なく学習に障害が生ずることよりも，急速に社会性が養われる学齢期にかん黙が続き，社会性が身につかないことであろう。さらには，過度の緊張感が本人の特性として固着し，人間不信につながり，ますますかたくなな性格を増長させていくことの恐れであろう。

したがって，そのうちになおるだろうという希望的・楽観的観測のもとに，長期間適切なる指導も受けずにほうっておかれ，教育センターや児童相談所・病院などに連れてこられる時には，